

大雨で冠水した道路の危険性

近年、気候変動の影響により、短時間で大量の雨が降る集中豪雨が増加しています。

気象庁のデータによると、強い雨の年間発生回数は1976年～1985年の平均に比べて、2014年～2023年の平均では約1.8倍の増加とないます。

集中豪雨と言うと河川の増水や土砂崩れなどの災害をイメージしますが、街中では道路を冠水させ交通に影響を与えます。冠水した道路もまた様々な危険が潜んでいるので、適切な対策と注意が必要です。

<冠水した道路を歩いて通行する場合の注意点>

冠水した水は濁っていることが多いため、段差につまずいて転倒したり、蓋の開いたマンホールや用水路、側溝などに気付かず、転落して流されたりする危険があります。やむをえず冠水している場所を移動する時は、できるだけ2人以上で行動し、水深の深そうなところや流れのあるところは避け、傘や長い棒などで足元が安全かを確認しながら進みましょう。

たとえいつも通っている道でも、絶対に油断せず慎重に進むようにして下さい！



<冠水した道路を車で通行する場合の注意点>

冠水した道路では、タイヤのグリップ力の低下やハンドル、ブレーキのコントロールができなくなるなど車両の制御が難しくなります。一般的に安全に走行できる水深は、10cm程度までです。また、走行速度によっても危険性は変わります。日本自動車連盟（JAF）によると、同じ水深でも速度が速くなると巻き上げる水の量が多くなるためエンジンに水が入りやすくなり、トラブルが発生しやすくなるとの調査結果が報告されています。また、同じ形状（車高）の車でも“電気自動車”“ハイブリット車”“ガソリン車”などのシステムの違いによってもトラブル発生の有無が変わるそうで、自身の車と同じような形状の車が走行できているからと言って、自身の車も走行できるとは限らないので注意が必要です。ちなみに、同じ条件で走行不能になったのはガソリン車で、一番トラブルが少なかったのは電気自動車だそうです。いずれにしても、**豪雨時は冠水しやすい場所を通らないように、冠水路に遭遇した場合は安易に進入せず可能な限り迂回しましょう。**

冠水した道路の歩行や運転は、深刻な被害を引き起こす可能性があります。先月の“備え”で紹介した『浸水キキクル』を利用すれば、浸水被害発生の危険度を常時確認可能です。外出先で豪雨に見舞われた場合は速やかに情報収集を行い、避難もしくは迂回するように心掛けましょう。